

木から降ろされたオオバタン。
足には釣り糸が絡まっている



1泊2日かけて麓の村に向かうM村住民



ドリアン、パラミツなどの果樹と野生樹木が混交する森。
人為が加わることで形成されたこの森は
オオバタンが採餌のためによく飛来する場所でもある

ループ状にした釣り糸を
木の棒にとりつけた罠。
これをドリアンなどの
高木に仕掛ける



風にかかったオオバタンを
降ろすアコさん。高木に
罠を仕掛けるので、
この罠は木登りの上手な
人しかできない



M村住民にとってもっとも重要な
収入源、丁子。その出来が
オオバタン猟にも影響する



オオバタン (学名: *Cacatua moluccensis*)

体長46~52センチメートルの大型白色オウム。インドネシア東部セラム島とその周辺の島々にも生息する。堅果類、果実、昆虫などを食べる。ピヌアン (*Octmeles sumatrana*) などの大木の洞に営巣し、1年に1度1~2個の卵を生むといわれているが、繁殖生態はまだよくわかっていない。国際野鳥保護団体バードライフ・インターナショナルの「絶滅の恐れのあるアジアの鳥」によると、推定生息数は6万2400羽から19万5200羽。個体数は減少傾向にあるとされ、その原因として住民の捕獲が批判されてきた。しかし、近年の研究では、当初考えられていたよりも差し迫った絶滅の危機に瀕していないこと、低地で展開する木材伐採が住民の捕獲よりもより深刻な脅威となり得ること、などが指摘されている。



海を渡るオウム

笹岡 正俊

(ささおか まさとし)

財団法人林業経済研究所 研究員

オウムで副収入

翼を見回りにきたわたしたちの気配を感じたのであろう。翼に足をとられて身動きがとれなくなったオオバタンは、翼をはたかせながら「ギヤーツ、ギヤーツ」とけたたましく鳴いた。獲物を確認したアコさん(仮名)は、山刀で入れた切り込みのわずかに足がはみ、足をかけ、翼が仕掛けてあるドリアンの大木をよじ登っていった。

二〇〇四年一月、インドネシア東部セラム島の中央山岳地帯に位置するM村でわたしはアコさんがおこなうオオバタンの猟に同行させてもらっていた。

オオバタンは、セラム島とその周辺域にしか生息しない白色のオウムである。かつてベトナムとして国際的に高い人気を集め、八〇年代にはこの島から七万五〇〇〇羽以上が海外に輸出されたといわれる。その後、乱獲による絶滅への懸念から「ワシントン条約」の付属書Iの記載種となり、国際取引が禁止された。また、国内法でもその捕獲や商取引が厳しく禁じられることになった。しかし、住民は今もオオバタンの猟を続けている。

M村は島のなかでもっとも奥地に位置する。麓の村へは丸一日から二日かけて山道を徒歩で行くしかない。したがって、もち運びが容易で高い値がつくオオバタンは僻地山村から市場に出せる数少ない林産物のひとつとなっている。

とはいえM村住民にとってもっとも重要な収入源は、オウムではなく丁子(クローブ)だ。彼らは九月から一月にかけて、南海岸に出稼ぎに出て、沿岸住民の農園で農業労働者として丁子の摘みとりをおこなう。収穫した丁子を山地民は農園保有者と折半した後、自分のもち分を集荷人に売っている。そうやってえた現金は、その後数ヶ月、場合によっては一年以上にわたって、彼らが塩や灯油など生活必需品を購入するために充てられる。

貧者が獲り、富者が買(飼)う

丁子の出来は年によって大きく変動する。したがってアコさんによると、丁子収入が芳しくないときはオオバタンを捕獲して沿岸部の仲買人に売り、当座を凌ぐ現金をえるのだという。つまり、オオバタンは丁子収入の補完的・代替的収入源のひとつなのだ。

アコさんたちが捕獲したオオバタンはいったどこに運ばれてゆくのだろうか。一部は国内の野鳥マーケットに、そして一部はおそらく国外に密輸されている。日本は現在、シンガポールなどから年間一〇〇羽以上のオオバタンを輸入しており、その多くはフリーターの繁殖個体だとされている。しかし、TRAFFIC(野生生物取引のモニタリングをおこなっている国際NGO)の調査によると、セラム島で捕獲された野生のオオバタンがメダン(スマトラ島)を経由してシンガポールなどに密輸されているという。したがって、日本に輸入されるオオバタンのなかに、そうした野生個体が含まれている可能性もないとはいえない。

そのようなことを考えながら、日本におけるオオバタン価格をインターネットで調べていて驚いた。某ベトナムショップで一羽七〇万円の売値がついていたからだ。山地民の売値は一羽七〜一〇万ルピア(八〇〇〜二〇〇〇円)だから、その差はじつに五八三〜八七五倍である！わたしが見た山地民のオオバタン猟はおおむね生活必需品の購入などで現金が必要になったときにおこなわれる小規模かつ必要充足的な猟であるといっておかたらない。しかし、日本でこんなにも高く売れることを知ったら、彼らのなかには次のように言い出す人がいるかもしれない。

「マサ、たくさん獲るから日本に運んで売ってくれ。一緒にひと儲けしよう！」